

ひろば

Vol.109

2008.3.15.

東京工芸大学同窓会

<http://www.t-kougei.gr.jp>

〒164-8678

東京都中野区本町2-9-5

Tel 03-3372-1321

design SALAT

新会員を迎えることば

東京工芸大学同窓会副会長

奥田 昇

東京工芸大学御卒業、心よりお祝い申し上げます。諸君は、学生生活を離れ、社会生活という新しい扉を開くわけです。

卒業を前に、諸君が4年間、工芸大学で学び、考え、実行してきた集大成の発表の場である東京工芸大学芸術学部卒業、大学院終了制作展2008に行き参りました。それぞれに個性があって、私の時代では考えもつかないような作品もたくさんあり、大変興味深く拝見致しました。これからの実社会では、大学で培ったその個性を如何に活用出来るかが鍵となってくると思います。社会と自己との狭間で、様々な葛藤にぶつかることもあるでしょう。様々な不平や不満、不安も起こり、先が見えなくなったような錯覚に陥ることもあるかもしれません。

そんな時は、是非、諸君がこの東京工芸大学で学び、考え、感じ、生活したことを思い出して、生きる力としていただきたいのです。

平成18年度9月に、同窓会・全国支部長会を再開いたしました。現在、全国に30数ヶ所の支部が出来て居ります。この同窓会の目的は、母校の更なる発展と、諸君の活躍のサポートであります。

諸君が社会で活躍すること、人間として尊敬されるようになるということは、同窓会の活性化、ひいては大学の発展につながります。そして、諸君が社会でぶつかるであろう様々な壁を乗り越える場面に立ったとき、同じ大学で学んできた者として、少しながら人生を長く生きている者として、手助けをしていきたいと思っております。

同窓会は平成19年に創立80周年を迎えました。会



員には9期生、95才前後の方々もいらっしゃいます。世代を越えて受け継がれる歴史の中に、諸君も立っていることを実感していただければと思います。

最後に、どんな道に進もうとも、正しく生きていただきたいと思っております。

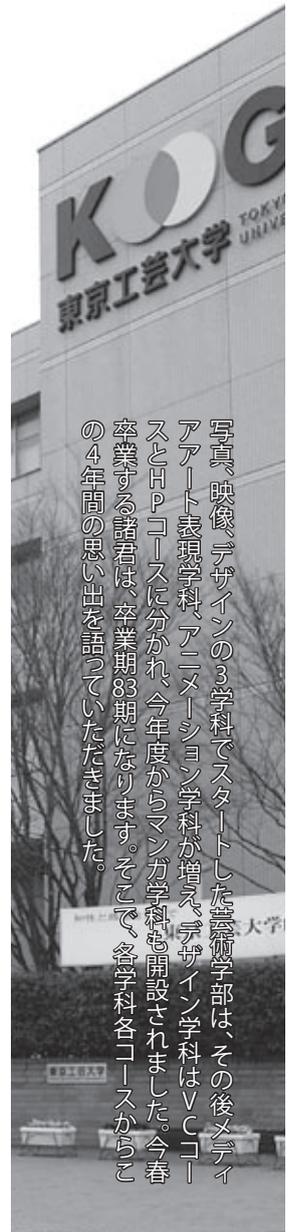
時間を守る、嘘を言わない、他人の気持ちを考える、人として当たり前のことを当たり前にやる。それが正しく生きるということです。

どうぞ、芸術家である前に、人として尊敬されるようになって、自由に、社会という大空に飛び立ってください。

そして、諸君が何か困難にぶつかったときは、どんな困難もいずれ絶対に乗り越えられる、ということを確認して、困難を感じてその時を精一杯生きてください。諸君がそれらを乗り越えた時、その困難はいずれ諸君の宝となるのです。

ご活躍、ご期待しております。

卒業



写真、映像、デザイン3学科でスタートした芸術学部は、その後メディアアート表現学科、アニメーション学科が増え、デザイン学科はVCコースとHPコースに分かれ、今年度からマンガ学科も開設されました。今春卒業する諸君は、卒業期83期になります。そこで、各学科各コースからの4年間の思い出を語っていただきました。

写真学科



田中 亜実

厚木時代の二年間、所属していたサークルで私はウッドベースと出会い、音楽を演奏する楽しさを知った。私は毎日のように部室に通い、練習をした。その結果、ウッドベースの練習時間が写真制作の時間を上回る事となる。サークルで出会った先輩や友人、ジャズとウッドベースの存在がなければ今の私は形成されていないだろうという事を考えれば、この結果もそれほど悪いものではないと思う。

スカートのしつけ糸をつけたままで臨んだ入学式。
あれから早四年。
一体私は何をしていたのだろう。

撮影にもプリント作業にも悪戦苦闘し、「どうして写真なんかやってるんだ」と自問自答を繰り返した学業。けれどもある時急にシンプルな答えが出て、私は進むべき道を見つけた。自分で勝手にややこしくしていただけで、写真は昔と変わらず楽しいものだった。

とそれらしく語ったものの、この四年で写真に関わった時間よりもウッドベースを弾いていた時間の方が圧倒的に多かった事を勇敢にもここで白状したい。

映像学科



森井 明

大学生活が終わる。4年間という時間は、決して短いものではない。が、終わろうとしている今思うと、非常に短い4年間だった。大学という場所は、不思議な場所だ。それまでの小・中・高とは、全く性質が異なる。まず大学に入るには、自分の意志で学校を選ぶ必要がある。

学びたい分野、学ぶ内容、様々なものを選択する必要がある。

たくさんの方の選択をしてきた結果、同じような分野を目指す者が集まるのだ。そのような者同士だから、話が合わないわけではない。大学4年間、何が一番糧になったか。そう聞かれたら、「大学で出会った仲間との交流」と即答するだろう。ただ楽しいだけの友達付き合いではなく、授業についてのディ

デザイン学科VC



川下 勇也

スカッションや厳しい指摘。制作で切羽詰って意見がぶつかることも。本音で考えて話せる友人たち。
彼らとの出会いは4年間で大きく私を成長させてくれた。卒業で進む道は違ってくるが、その事実は変わらぬ。
何よりもいろいろな事を教えてくれた彼ら、出会えたことに感謝。そして、これからもよろしく。

私の大学4年間を一言で表すと「一生懸命」です。作品制作に本気で取り組んでいました。

ビジュアルコミュニケーションコースでは1、2年の時に、デザインの色々な分野の

授業を学びます。教授から課題が出されると、私は寝る間を削って制作に打ち込みました。作品が出来上がり良い評価を期待して講評に望みますが、大抵は評価が芳しくありません。悔しく思うことが多かったですが、「私の得意なこと、やりたいことを見つけない」という気持ちで続けていました。評価をされる機会もあり、段々経験値が溜まっていき良いデザインが少しずつ分かってきました。友人の作品からも刺激を受けました。そして私がやり続けたいと思うことを見つけてきました。3年生からはコミュニケーションデザイン研究室に所属し、培ってきた力をデザインの企画に注いでいます。将来はキャリアクターで社会の問題を解決していくデザイナーになりたいと思っています。これからも自分磨きを続けていきます。



川上 明代

小田急線とバスに揺られ、1時間30分かけて大学に通う生活に、ほんの少し名残惜しさを感じる私は、とても幸せなのだと思っています。
大学生活を振り返ると、そのほとんどが

ORANGEでの事です。プレゼン近くになると、みんなが急に慌しくなるORANGE。その時は必死でしたが、今思うとそれがなんだかとても楽しかったです。普段は忘れがちですが、学生として、学校での事で忙しいと思えていた事がすごく幸せな事だったのだと思います。大学を卒業するのに、寂しいと思う私は、先生や友達にも恵まれていたのだと改めて感じています。
今私は、社会に出る事は不安よりも楽しむ気持ちの方が大きいです。そう思えるのは、4年間で学んだ事や経験してきた事の一つの答えなのかもしれません。



高嶋 友也

メディアアート表現学科

大学生活4年間の

思い出し今後への抱負

私がメディアアート表現学科に入学したのは2004年4月。今から4年も前になります。当時はやりたいことが幾つもあった、でもそれを本気で作っていく自信もなくて、もやもやしていたことを記憶してい

ます。

この学科に入った正直な理由は、様々な授業を通して、一番やりたいことを見つけようと模索する為でした。バンド活動やWeb制作などもこなしましたが、3年生になり、吉良研究室にて映像制作に真正面から取り組んだことが、私にとって一番大きな経験でした。初作品「夜の泉」(チーム制作)がコンペ入賞し、それまで趣味だった映像を本気で追求していきたいと思うようになりました。

その後、自主制作した実写ショートムービー「BRUSH」は黒澤明映画祭を含む5つのコンペで受賞、都市伝説をテーマにした歌ものアニメシリーズでは企画・作画・作曲・演奏などほとんどの役割をこなした「さくらくん」「頭に回るは笑い声」がHETAデジタルスタジアムに取り上げられるなど、良い結果を残すことが出来ました。

同時に、大学生活での沢山の出会い別れの末、本当に尊重し合える制作仲間と出会えたことが、とても大きな財産です。

卒業後は大学院に進学しますが、良い作品は所属した場所からでなく、自分の中から生まれるものだと思うので、今後もしっかり止まらずに多くの作品を生みだしていくと共に、今よりも沢山の人人々に楽しんで見てもらえるよう努力していきたいと考えています。

アニメーション学科



岡野 江美

私はアニメーション業界に就職するためにこの学科を選びました。そして、そのために何をすればいいか、毎年一年間のテーマを決めて4年間を過ごしました。そうやって区切りと目標をおくと4年間なんてあっという間です。

つまり、度々学科の先生方や友達に助けられ、同じものに関心のある者同士の関わりの深さやありがたみを実感しました。

また、工芸大のアニメーション学科にはクリエイター志望の人が大勢いるので、プロデューサー志望の私にとっては、クリエイター系の人の考え方や感覚を身近に感じられて、いい勉強になりました。

卒業後は念願叶ってアニメーション制作会社に制作進行として入社します。同じ業界に進む友達も多いので、一緒にがんばっていききたいと思っています。

卒業間近の今、改めて入学時の私と今の私を比べると、成長したな、と自信を持って言えます。そんな自信を与えてくれる大学4年間でした。

「芸術学部卒業・大学院修了制作展2008が盛況でした」



2月22日から24日の3日間開催した卒業・修了制作展は、天候にもめぐまれ、昨年にも増して6,500名余りの方が見ていただきました。学生やご父母・友人、そして同窓生、一般の方、特に若い方が多くおいでくださいました。特に初日の22日には同フロアの別会場にて企業懇談会も行われ、学生が作品の前で企業の方と直接話をする姿も多く見られました。芸術学部を卒業・修了するすべての学生がこのような社会に向かってプレゼンテーションすることは、とても意義あることです。同窓会の皆様のおかげをこれからもよろしくお願ひ申し上げます。

広報委員 記と写真：福村 敏 (45期)
写真：糸賀 成永 (56期)

開催日：
平成20年2月
22日(金)、23日(土)、24日(日)

会場：
六本木アカデミーヒルズ40
港区六本木6-10-1 (六本木ヒルズ内40階)
地下鉄日比谷線「六本木」駅下車徒歩4分
地下鉄大江戸線「麻布十番」駅下車徒歩6分

東京工芸大学芸術情報館
中野区本町2-4-7
(東京工芸大学中野キャンパス内)
地下鉄丸ノ内線、大江戸線「中野坂上」駅下車徒歩7分

東京工芸大学
芸術学部卒業
大学院修了
制作展二〇〇八
二月二日(金)―二四日(日)

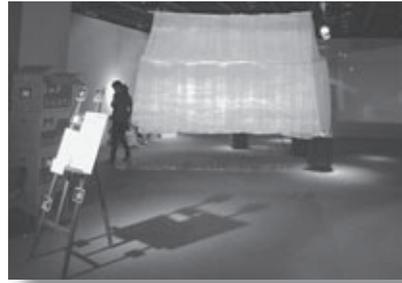
写真学科
映像学科
デザイン学科
メディアアート表現学科
アニメーション学科
大学院芸術学研究科

入場無料 **KOGEI**
TOKYO POLYTECHNIC UNIVERSITY

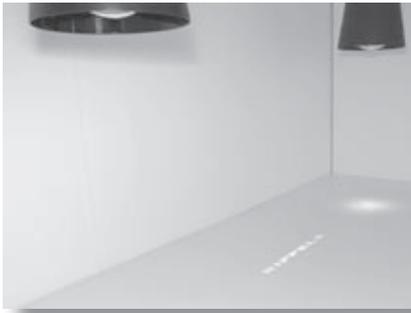
写真学科



映像学科



デザイン学科 V C



デザイン学科HP



メデイアアート表現学科





アニメーション学科



ひろはのページ



田沼武能 (24期)

立木義浩 (33期)



立木義浩写真展「時代のおとこ」

個展「白蛾に燃ユル書」



遠藤拓人 (78期)

草井裕子 (82期)

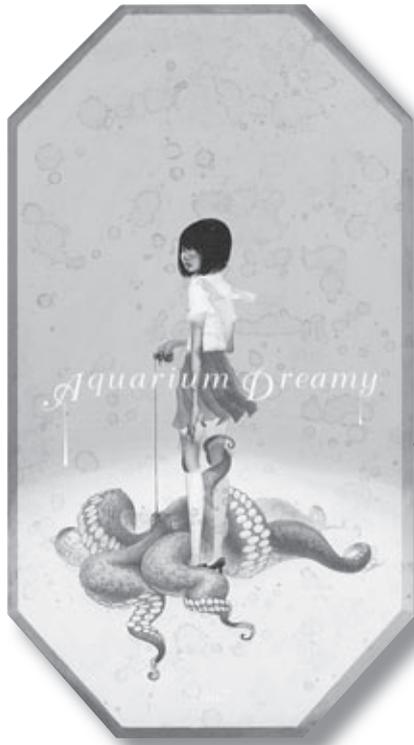


草井裕子展

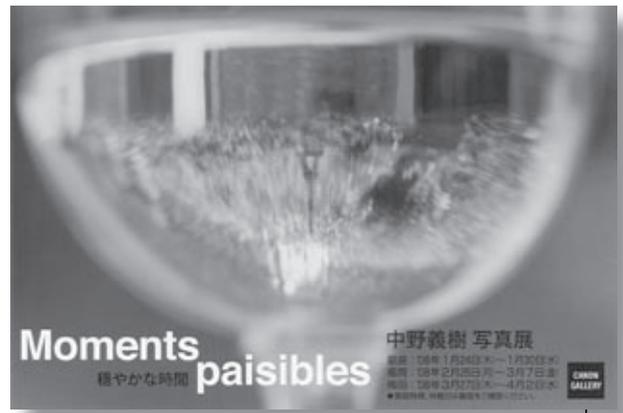


内山勇士 (81期)
田中邦治 (82期)
張 光榮 (81期)

個展「アクアリウム幻想」



上田風子 (76期)

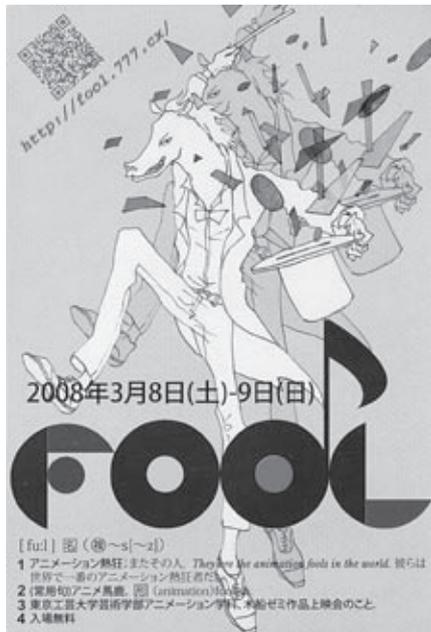


中野義樹 (53期)

枝川一巳 (32期)



木村伊兵衛展写大ギャラリー



木船ゼミ作品上映会



南川 三治郎氏 「41期」 写真巡回展

南川氏の写真展が3会場のギャラリーで開催された。今後の予定は2008年4月4日(金) 6月末まで、玉川大学の予定がある。

- 和光ホール 2007年12月15日(土)～25日(火)
「日・欧 巡礼の道」展 日本編 熊野古道
- 富士フィルム・フォト・サロン 2007年12月28日(金)～2008年1月30日(水)
「日・欧 巡礼の道」展 欧州編 カミーノ、デ、サンティアゴ
- 三重県パラミタ、ミュージアム 2008年1月2日(水)～1月31日(木)
「日・欧 巡礼の道」展 日本編 熊野古道
- 予定
玉川大学 教育博物館 2008年4月4日(金)～6月末予定
「日・欧 巡礼の道」展 日・欧編 熊野古道一カミーノ、デ、サンティアゴ

3会場とも大きな反響と大盛況で、見学者は熱心に鑑賞し心を打たれた。欧州編より8×10カメラを駆使して撮影されたスケールの大きな写真と、目の前の美術品を鑑賞しているような錯覚と、欧州の石畳の巡礼の道に今いるような、町や人々の豊かな表情、寺院、ステンドガラスの美しさを見ることが出来る。写真展を見落としされた方は4月開催の玉川大学教育博物館で鑑賞されたい。同窓生諸氏・本学生・特に同期生の方々は訪れ素晴らしさを見て楽しんで下さい。
広報委員



「内閣総理大臣賞」・受賞の榮譽



主催 社団法人 日本写真文化協会
2007年度 第54回 全国写真展覧会フォト・コンテスト

多数の応募者の中から、厳しい審査を受け小坂文誉氏 The・漆〔輪島塗〕作品が最高の「内閣総理大臣賞」の受賞に輝き、広報委員会では小坂氏に受賞作品写真と喜びのコメントを要請し快く受諾いただきましたのでご紹介をいたします。

広報委員会

「内閣総理大臣賞を受賞して」



この度は社団法人日本写真文化協会主催、第54回JPC全国写真展覧会フォトコンテストにおいて榮譽ある賞を頂き、私にとつて、また、写大の卒業生としても大変名譽な事となり、身が引き締まる思いでいっぱいです。

さて、皆様すでにご存知の事と思いますが昨年3月、石川県は能登半島地震に見舞われ大変な被害を受けました。当地金沢は、幸いにも被害も殆ど無く済みましたが、輪島を中心に能登地方では大変な被害になり、現在でも震災の復興が続いております。

そんな中、郷土の写真人として、「何かの形で復興のお手伝いになる事が出来ないか?」と考え、輪島塗を題材に取り上げ今回の作品としました。

輪島塗は全国的にも有名な伝統工芸で、品・質・技・3拍子揃った日本を代表する漆工芸品でも有ります。120余りの作業工程を経て作られ、国際的にも評価が高く、海外で「JAPAN」と言う愛称で親しまれています。

輪島漆器には独自の文様や高度な細工がされており、質感・形の美しさ・色彩・素材

の違いを表現するのには大変難しい被写体です。撮影ではシンプルなライティングを心掛け、構図も形の審美性を強調し、デザイン的にアレンジし撮影しました。

この作品を見て頂き、輪島塗の「素晴らしさ」が少しでも多くの方に伝わり、「関心を持って貰い、輪島に来て頂く事」が「地震で災害を受けた地域の復興」につながると思っております。

なお、2007年12月、石川県は文化庁に、「産地の復興につながる。」との理由から、輪島塗をユネスコの無形文化遺産の国内候補に入れるよう要望を出しました。

*プロフィール

イメージクリエイションフォトコザカ
小坂 文誉 (コザカフミタカ)

〒921-8033
石川県金沢市寺町4丁目2番8号
TEL 076-241-3919

東京写真短期大学 写真技術科 52期卒
東京工芸大学同窓会石川県支部長
日本写真文化協会会員
日本写真館協会会員
石川県営業写真協会会員
石川県営業写真協会 文化部長
国家検定 一級写真技能士



「新宿～それぞれの
アイデンティティー～」



作者プロフィール

1984年 東京都生まれ
2005年 フォックス・タルボット賞 佳作 受賞
2006年 フォックス・タルボット賞 第2席 受賞
2007年 東京工芸大学芸術学部写真学科 卒業
現在 東京工芸大学大学院芸術学研究科 在学中
オフィシャルサイト <http://akya.jp/>

うともう二度と無い新宿にいる人たちの姿を何度も残していくことで変わっていききました。僕はこの作品を通過点にして、許可をいただけただけの人たちに感謝しつつ、素晴らしく、いつも違い、変わっていきたくさんの「新宿」をこれからも残していきたいと思えます。

作者コメント

大学入学時から今まで、僕はいろんな「新宿」を撮り続けてきました。僕にとつてこの「新宿」はとても難しく、苦悩の連続でした。ただ、それはその日、その時、その場でなければ見ることの出来ない、一度逃してしま

ヒマラヤへの夢・絆・友情

パンガ遭難13回忌、ヒマラヤ現地追悼祭

東京写真大学山岳部OB会会長 中野 慶一 (27期)

写真大学山岳部創設1950年からはや58年、50年の節目には50周年記念式典を盛大に開催、合わせて50周年記念誌として「東京写真大学 山岳部50年の足跡」(ケース付き上製本)を発刊しました。この年史はOB会員全員が協力して、資金、編集、印刷、加工まで全て会員の手により製作されたものです。詳しくは「ひろば」87号と90号に掲載させて頂きました。「継続は力なり」を実感しているところです。

トをはじめ8,000m級の山々の一大パノラマを間近に望むネパールヒマラヤへのトレッキングがようやく実現できました。OB会メンバーら6名と明治大学山岳部OB等7名 計13名は10月29日勇躍羽田を飛び立った。安全と思われていたトレッキングであったが、季節外れのモンスーンによる大雪で安全策をとってパンガロツジに避難したのに11月10日早朝、雪崩が発生ロツジごと押し潰されてしまった。現地ネパール人を含め25名が一度に遭難するという山岳史上最悪の事故となった。山の自然には絶対安全は無いとわかっていても、自然の怖さを痛感したところです。全員50歳台の働き盛り 不運運命と言うより仕方が無いのか、唯唯無念の極みです。

であったが、参加メンバーの年齢が77歳を筆頭に平均69歳のため、4,550mのパンガでは無理と判断して遺体を茶毘に付したシャンボチエの丘・3,800mで執り行うことに決めた。全日程は13日間、経費を極力抑えるためビザの取得、往復航空券、ホテルの手配もメンバーが行い、トレッキングのシエルバ・ポーター・コックとロツジ等の手配はカトマンズのエージェントにメールで依頼する。



「追悼のことば」を捧げる (本人)

1995年長年の夢でもあったOB会として万年雪をいただく世界最高峰エベレスト

私たちOBは、同じ釜の飯を喰い、命のザイルをつないだ山仲間、心の中にその絆は脈々と繋がっており、現地での追悼を心掛けてきたが丁度2年前(2007年13回忌)の時期にネパールヒマラヤへの追悼登山計画が具体化した。昨年の新年会るとき参加メンバーがまとまり、5月案もあったが準備不足のため10月に決定した。

現地追悼祭参加者は
中野 慶一 (27期)
太田 孜 (28期)
猪野 一夫 (30期) 隊長
中島 雄二 (31期)
南波 義夫 (32期) 渉外担当
大木とし子 (34期) 故大木磐夫人
安部 武 (36期)
星名 総子 (38期) 行動記録担当
杉嶋 迪子 (39期) 渉外担当
近藤 稔 (50期) 映像記録担当
以上10名

当初参加予定であったアメリカ在住の38期辻野三郎丸夫妻は、日程の調整がつかず急遽不参加になった。パンガから高度を下げて4,000m近くまで登るため、高度順応や足腰の鍛錬が必要と星名・杉嶋女史は三浦雄一郎のミウラドルフィンズ「各種体力測定と低酸素トレーニング」プラス富士山登頂をこなし、他のメンバーもそれなりの訓練で体力強化をはかった。

2007年10月12日成田よりフライト、バンコクで一泊翌日ネパールの首都カトマンズに着く。個人で担ぐカメラ・三脚・水筒・軽食と小物類はサブザックに詰めて、その他全てダツフルバックに入れてポーターに運ばせる。14日カトマンズから小型機でルクラに飛ぶ。



茶毘に付いた窪地で準備

追悼祭は当初雪崩遭難したパンガの予定

当初参加予定であったアメリカ在住の38期辻野三郎丸夫妻は、日程の調整がつかず急

(3,440m)へ登る。途中元氣なヨーロッパの登山隊・トレッカー隊にナマステ(こんにちは)と声を掛けられながら追い抜かれたが、ゆつくりと我われのペースで急坂を登る。ナムチェ・バザールはシエルパ族の故郷とも言われ、登山基地でもある。16日の午前中は高度順応のためのんびり休息とバザール見物、午後シャンポチェのパノラマホテル(3,800m)へ登る。夕方から雪が降りだし明日の追悼祭を心配したが夜半に止み一安心。夜、追悼祭に捧げる「追悼のことば」を、想いをはせてヘッドランプのもとで綴る。

17日早めに朝食を済ませて新雪を踏んでシャンポチェの丘、茶毘に付した岩峰のもとに向う。どんよりとした天候の中、石を拾い集めてケルンを積み用意した花・線香・ローソクと皆が好きだったお酒やお菓子を供え、遭難者全員の遺影を飾り「13回忌追悼祭」を執り行う。はじめに「追悼のことば」を捧げる。



追悼祭を終えたOB 10名



雪煙舞い上げる エベレスト (8,848m)

「追悼のことば」

わが敬愛する東京写真大学山岳部OB会のメンバー、村山伊吉(32期)、大木 磐(34期)、波多野英男(34期)、梶原達夫(38期)、小森敬司(39期)と水野晴之(34期)の諸兄が1995年11月10日早朝ここネパールヒマラヤパンガにて雪崩に遭遇、無念にも帰らぬ人となりました。OB会としてはじめてのヒマラヤ登山、厳しい中にも楽しく安全を期して企画したにもかかわらず、このような結果になったこと返す返すも無念の極みです。今年は無難に迎えるに当たり現地での追悼祭を行いたいとOB会有志が集まり、今日ここに追悼祭を執り行うことができました。懐かしい顔ぶれが揃ったこと御霊の前にご報告いたしますとともに皆様、天国での安からんことをお祈り申し上げます。 合掌

2007年10月17日午前9時20分
東京写真大学山岳部OB会有志一同

そのあと、各OB・遺族が先輩として同輩・後輩として線香を手向けながら心に秘めた思いを念じました。自然と流れた涙、私だけではなかつたようです。特に私の場合、参加予定であったが出発4ヶ月前入院大手術したため不参加、付いていないと嘆いただけに想いは人一倍です。

無事追悼祭もおわり、気持ちもすっきりしたところでサーダー(シエルパ頭)の自宅のあるクンデに向う。着く頃には気持ちを表すように厚い雲も流れ前日の降雪で白き神々の座が輝き、8,000m級のエベレスト、ローチェをはじめ眼前にはタムセルク、アマダプラムがせまり、夢中でシャッターをきる。両脇石積みされた道を下りクムジュンへ、このゴンバ(寺院)には「イエティの頭皮」が保管されている。いろいろ遺産を見学してから、エベレスト・ピュウ・ホテルを経由してシャンポチェのパノラマホテルに戻る。18日、事前の打ち合わせで



タムセルク (6,623m) をバックに記念写真



ゴキョピークへ向う 南波(32期)右と近藤(50期)

健脚で日程の取れる南波・近藤の両君は、12日前登ったゴキョピーク(5,483m)へ出発、本隊はターメとナムチェに分かれ、翌日ナムチェに合流して下山の途につく。モンジョとルクラのロッジに2泊して、21日カトマンズに戻る。

22日は気持ちのゆとりも出来て、のんびりとカトマンズの世界遺産を見学したり買い物をするが街なかの排気ガスには驚いた。翌23日カトマンズから帰国の途につきパンコク経由で24日早朝成田に到着、ゴキョ組も31日帰国、全員無事に追悼登山が終了しました。

最後にこの追悼登山のため渉外・準備、現地でのサポートをしたメンバー諸兄に感謝いたします。合わせてアメリカ在住の辻野 三郎丸氏(38期)から色々ご支援を頂き厚く御礼申し上げます。

山岳部OB会はいくつもの峠を越えてきましたが、新たに 絆と友情 を深めてゆきたいと念じております。

関西支部



双美会 平成19年11月18日 於：奈良「江戸川」

双美会報告

双美会は平成19年11月18日、紅葉たけなわの、奈良に集う！

近鉄「西の京」駅前に集合した一行は奈良にお住まいの上田史郎（23期）さんのご案内で、世界遺産登録の白鳳・大伽藍が建つ薬師寺を参拝しました。

上田さんが力説されたのは、薬師寺には国宝・重文の仏様が多く祀られており、金堂の国宝・薬師三尊像（薬師如来、日光・月光菩薩）はもとより薬師如来の台座（国宝）に、特に注目して欲しい、と見どころを説明：！台座に描かれた葡萄唐草紋、ペルシヤの蓮華紋、中国の玄武・朱雀・白虎・青龍の絵は当時のシルクロードの交流が窺え、国宝の価値と歴史の重みに感銘しました。続く大講堂の重文・弥勒三尊像をはじめ日本最古の仏足石（国宝）、そして彫刻家・中村晋也師より奉納された十大弟子及び無着（阿僧伽）、世親（伐蘇呬度）両菩薩などを拝観する。北側に建つ玄奘三蔵院伽藍内に描かれた平山郁夫画伯の大唐西域壁画に見惚れ、余韻を抱いて薬師寺を後に懇親会場へ！

懇親会は西大寺の「江戸川」にて開催。今回は遙々鳴門から出席された29期の岩朝哲男さん、38期の村田 忍さんは和歌山の田辺から、他に初参加は42期の豊田光恵さん、工学部3期の野志敏郎さんと



上田史郎氏（23期）の説明を聞く一行

4人が新顔！宴たけなわで語る自己紹介は、日常の話から卒業後〇〇年の歩みまで、各自の話は延々と続き会場は一層盛り上がりました。

時を忘れての「双美会」一期一会の集い！次回を楽しみに解散しました。

記 30期 福岡 武雄

富山県支部



2007年9月27日午後6時30分より「エクセルホテル東急富山」15階にて「東京工芸大学同窓会富山県支部平成19年懇親会」を開催いたしました。連絡が遅れた事も災いし、生憎と総勢13名と参加者は少数でしたが随分と久し振りの同窓会ということでご今後に対しての建設的な意見も多く戴き、また欠席者からも次回を期待する暖かいお言葉を頂戴いたしました。今回は先ごろ提携合併した北陸フジカラー株式会社より富山支社長の八島氏（写真前列左より3人目）を来賓として迎え写真業界の近況を解説していただきました。業況は厳しいようですが参加者は意気軒昂で次回の盛会を期そうと万歳を合唱しての散会となりました。

富山県支部長 野崎 博
（写真前列右より
3人目黄シャツ）

岩手県支部

岩手県支部総会の開催について

前佐藤支部長の逝去により、支部活動が滞っていたところ、同窓会本部の80周年を期に当支部も再編しようとの思いから、主立った幹部による会合を重ね、ともかく今一度発会にこぎ着けようと言うことで、去る10月20日（土）於・エスポアールいわて会議室にて総会を開催いたしました。

県下には60余名の会員がおりますが、長らく開催していなかったことに加え時期的に婚礼シーズンとあって、会員のスケジュール調整が難しく、当日8名の参加となりました。

会議には、役員改選を行い下記の通りとなった。

- 支部長 村田 明（第34期）
- 副支部長 藤原 正彬（第35期）
- 顧問 藤村 富蔵（第20期）
- 〃 岩淵 晃行（第30期）
- 事務局 佐々木功一（第51期）



また、今後の開催について、定例会として更に多くの参加者を募り来年春の開催に向けて準備を進めることとしました。会議の後の懇親会では、各々の時代の「写真」「写大」「工芸大」の思い出話や変わりつつある現況の話について花が咲きました。

30期同期会



10月6日第6回30期同期会（技術科、工業科、製版科）が渋谷のアイビーホール青学会館で30名が参加して3年ぶりに開催されました。半世紀前の学生時代の思い出話から、昭和30年卒業当時、社会人としての第一歩を踏み出した苦しいながらも楽しかった時代の前向きな生き方などタイムスリップしてその場、その時に戻れる素晴らしい仲間です。73才を過ぎて問題多い平成の現状と将来への不安、話題は多岐に亘りつつ次回開催の期待を含め3時間半の同期会を終了しました。

（30期写真工業科 大城正宏 記）

2007年10月7日（日）新橋第一ホテルで開催された、東京工芸大学同窓会「創立80周年記念大会」に出席したのち、34期（技術科）の学友は新橋ビアホール・ライオンに集合。よく飲み食べ、時間のたつのも忘れ話し、大いにもりあがった。神戸の井上君、小田原の永原さん、静岡の深沢さん（旧姓松野）遠くからおつかれさまでした。佐藤君いつも、重い機材を持ち込み記念撮影ありがとう。この写真の一枚が全国にいる学友の方々が次の機会には是非とも参加しようと思う気持ちになればと思います。次も又元気で再会を約束し外の月を眺めながら別れを惜しむ姿が印象にのこった。この日の一日は同窓会、会場で先生や、先輩、後輩、同期生とも会え、佳き一日でした。

（中村 正弥 記）

34期のじぶい



34・写真工業科・同期会 （平成19年12月8日）



34期工業科では、昨年の12月8日（土）浅草にて、卒業後48年目の同期会忘年会を開催しました。会場は、大谷泰章氏のみが知るところ、産業会館の裏近くに存在する飲み屋のため、先ずは浅草雷門大堤灯の前に集合。そして、浅草寺の暮の賑やかさを横目に、会場の「麻布クラブ」に到着。そこは、やけに人懐っこい2匹の猫と世話好きな女将が出迎える、全く看板のない民家でありました。今回は、入学時に工業科で、その後技術科に移った太刀川静陽氏（北海道）が特別参加。総勢18名が再会を喜び、楽しいひと時を過しました。

（34期 川名・記）

堤先生を偲ぶ



同窓会顧問

東京工芸大学名誉教授

故堤重利先生のお別れ

同窓会副会長

大澤

登 (30期)

堤重利先生(30期)は、去る1月21日77歳の生涯を肝臓がんの病気で逝去されました。東京工芸大学での数々の業績を偲び衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

先生は、本学短期大学製版技術科の1期生として昭和30年3月に卒業と同時に助手として本学に奉職されました。その温厚な性格と粘り強い意思とにより、昭和36年7月に助教に昇任され、写真工業科長、写真応用科長を歴任し、昭和53年11月には教授に昇任されました。昭和62年7月から短期大学部長として平成9年3月同学部が閉校するまで学部長の重責を勤められました。

平成7年4月から写真センターを併任され、また、平成8年4月には女子短期大学部教授に併任し、平成11年4月からは学部長に就任され活躍さ

れました。

先生は、学校法人の基礎となった短期大学部と女子短期大学部の両学部で通算46年間勤務され文字通り短期大学生の父親か兄貴の役割を果たされた。この間、在学生や卒業生の就職指導、印刷技術指導、映画技術相

相談等に対しても真摯に受け止められ、あらゆるチャンネルを利用して、教え子の面影を見られました。その教育思想は、地方の卒業生までにもおよび、各期の同期会や研究会と呼ばれ各地をまわられたと伺っています。

先生は同窓会にも力を注がれ、永年会員窓口理事として苦情や入試等に相談を受けられました。本当に一人一人が各地でお世話になりました。このことは会員の皆様が、個々に良くご存知のことと思います。在職中は、本部役員の常務理事、理事長、副会長を歴任されて活躍なさいました。

平成13年3月に本学を定年として去られるまで、大学および同窓会に数々の業績を残されたことにお礼申し上げます。

堤さんと私の関係は、不思議な縁で短大卒業時に遡ります。卒業の時に島崎先生に呼ばれ本学助手に奉職しませんかとのお話が2人にもありました。その時に提示された給料が5,000円だったと思います。私は給料の関係でお断りしましたが、堤さんはお受けになりました。結局私は当時給料が9,000円の発明協会に勤務しました。その後、この時の関係から30期同期会の代表幹

事を2人することになりました。無論、技術科からは清宮、千葉、前川、奈良岡、渡部さん。工業科から風呂田、藤森さん。製版科から古屋、村山さんの人達の協力も得ていますが、しかし、いまだに同期会が開催出来たことは、この時の堤さんの力によるところが大きかったです。

また、私が本学法人の専務理事に就任し仕事が出来ましたのも堤さんの協力が大きくものをいえました。(同窓会80年史に寄稿)特に、女子短期大学部の芸術学部への転学の時には、短期大学部の芸術学部への転学の経験や苦勞話を教わり比較的トラブルも無く無事に終えることが出来ました。これは、法人専務理事としてよりも学校法人として良かったと思っています。

私は、堤さんに本年1月6日にお会いしました。その時には、大学でお付き合いました皆様にもう一度語り合おうとお話をされていきました。私もそのことを願っていました。その機会も無く急に逝去されましたことは、きつと心残りでしたと思います。しかし、お通夜、告別式に、多くの同窓生や大学関係者の人にご参列していただきました。きつと、堤さんは喜んで旅立たれましたことと私は信じています。

堤さんに代わりまして、同窓会の皆様の永年にわたるご厚情に対し厚くお礼を申し上げ、お別れを申し上げます。 さようなら

堤先生との思い出

写真技術科

岡村

征夫 (41期)

堤先生は30年間の上司であり、私の大学教員生活の全てといえます。

私は(故)村山先生の助手として研究室に残ったのですが、最初の研究が「フィルム」の静電気に関する研究」でしたので当時、電子写真を専門に

していた堤先生との研究から始まりました。村山先生は豪快で鍛え上げるタイプで無理難題が与えられました。堤先生は正反對の優しい先生で二人の絶妙なバランスの中で育てられたことに今になってあらためて感謝の念を感じております。

堤先生との思い出は研究・教育よりたくさん旅行として思い出されます。

最初は学会発表の旅でしたが、先生が16ミリ映画「木曾義仲」を作ることになり、さらに、学生旅行の下見と次々に出張名目が作られ、たくさん旅行し酒もたくさん呑みました。旅先では地元卒業生に必ず声をかけ、お世話になりました。写大の絆と人の情けが印象的な旅を経験できました。

「木曾義仲」の制作を機に堤先生は車の免許を取り、ドライブが多くなり、とにかく先生は車の運転が好きで、休憩もとらず運転をしている同乗者はちよつとした苦痛を伴う旅になりましたが、これも楽しい思い出になってしまいました。

芸術学部が発足し直接の上司関係はなくなり、退職されてからはお酒を控えるようになった先生とは大学の催しに來られる度にお話する関係になつてしまいました。私も定年退職が近づき、先生と昔の楽しいお話ができるかと思つておりました時、突然、お病気を聞きし、駆けつけた日にお亡くなりになりました。

こうして思い起こしてみますと先生の重みを改めて感じてしまいます。



〈予告〉 33期卒業の皆様へ

33期卒業50周年記念

写真展作品募集のお知らせ

本年2008年は写大33期の卒業50周年にあたります。この節目の年に「33期卒業50周年記念写真展(仮称)」を同期有志で企画いたしましたので、謹んでお知らせします。

写真展開催は本年秋に予定しており、詳細は開催場所を含め未定ですが、技術科、工業科、製版科の全員(物故者を含む)の作品を出展されるよう、諸兄諸姉の皆様各自1点の作品のご用意を事前にお願ひするため、本号にて予告いたしますので。

皆様には現業の第一線から退かれた方も多くおられると思いますが、ご用意頂く出展作品は本格、新旧、を問わず競合をいっさい排し、お互いに写真を学んで歩いてきた喜びを分かち合える場になれば良いのではないかと考えます。最近のデジタルによる可愛いお孫さんの気軽なスナップ写真も歓迎です。ぜひともご賛同の上ふるってご参加頂くよう、とりあえず今の時点でネガをご用意頂ければ幸いと存じ、お願ひ申し上げます。

なお、開催時期にあわせ33期全体の記念大会も催す予定です。

写真作品募集の要項については追って郵送またはFAXなどで直接に連絡申し上げる予定にしております。

企画有志代表・武井武彦(技)・小池恒裕(工)・清宮輝(版)。

訃報一覽(敬称略)

今井英雄	(第4期・旧制卒)
石黒太郎	(第11期・写真芸術科卒)
高橋冬彦	(第40期・写真理学科卒)
木村哲郎	(第23期・写真技術科卒)
黒坂三郎	(第29期・写真工業科卒)
公文哲	(第30期・写真工業科卒)
堤重利	(第30期・写真工業科卒)
西山東男	(第32期・写真工業科卒)
室屋孝一	(第32期・写真工業科卒)
鈴木二郎	(第33期・写真技術科卒)
沢野諒	(第33期・写真工業科卒)
小森実	(第38期・写真印刷科卒)
阿比留(三松)章子	(第41期・写真技術科卒)
福田加津美	(第41期・写真技術科卒)
薄井弘光	(第43期・写真工業科卒)
桜井真季子	(第52期・写真技術科卒)

以下の記事記述に誤りがありました。

80周年沿革史 P.77 伊藤真也氏の「伊藤」の字が間違っていました。

80周年沿革史 P.160 「バックは浅間山…」の山の名前は、蓼科山の誤りでした。

「ひろば」108号 P.5 右下の写真で後援会会長 川上氏と華輪会会長 宮永氏のお名前が入れ替わっていました。訂正してお詫び申し上げます。

編 集 後 記

今春、卒業を迎えられた皆様、おめでとうございます。

これから始まる新たな仕事や更なる勉学のなかで壁にぶつかる事もあると思いますが、その時は正面から全力で取り組み、人間力を磨いて素敵な人生を切り開いて行って頂きたいと思ひます。

池谷 彩子